

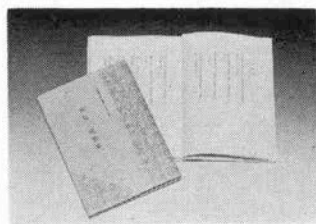
■随想三題

神戸に住んで

六十余年

下宿・借家・自宅

飛松 實



△日本歌人クラブ幹事
(財)兵庫県文化協会理事



となった。かくて戦中、戦後の苦しい生活を、この狭くて不便な借家で、十七年間も堪えて来たのである。

その間の妻の日日は大変であった。炊事洗濯ほかすべての用水は、手押しのポンプ井戸によらざるを得なかった。右腕が太くかつ長くなったというほどである。昭和二十九年に今の家を建てたとき、水道栓をひねって、「ああ勝手に水がいくらでも出てくれる」とつぶやいている妻に、私は思わず涙ぐんだのであった。昭和二十年、空襲が度かさなりだしたとき、私は独力で借家の庭に防空壕を掘った。よくやれたものだ、今更ながらその頃の若さと思う。

昭和二十八年に家主から明け渡しを求められ、離宮前町一丁目のこの土地を買った。新坪四千円足らずであった。新築後故郷の淡路から本籍を移し、今では完全な神戸っ子になってしまった。

かくて私は、天下の名勝地であり、文学と歴史の古蹟に富むこの須磨にも、半世紀以上すみついて来たのであった。

私の神戸生活は昭和と共にはじまった。昭和元年は一週間にも足りなかったから、実質的に昭和は翌二年からである。その昭和二年三月に御影師範学校（現神戸大学教育学部の前身）を卒業し、四月から当時屈指の名門校と言われていた諏訪山小学校へ赴任を命じられたのであった。

最初は御蔵通りの知人の二階へ下宿させて貰い、省線兵庫駅から汽車で通勤した。

神戸は坂の街である。今にして思えば、元町駅から諏訪山下の学校まで、遅刻せぬよう急ぐのはかなりしんどかったのではなかったか。しかし二十歳台の記憶には、その思い出は少しも残っていない。下宿先で一番閉口したのは南京虫であった。夜になると

机のそばまで這い出して来るし、床に入れば尚更のこと、痒さと痛さでおちおち眠れなかった。南京虫は当時の神戸名物で、一般民家の悩みのワーストであった。それが蚤、虱などと共に一掃されたのは敗戦後招来された殺虫剤DDTなどのおかげであろう。

さて、須磨で結婚生活に入ったのは昭和十三年である。空き家など殆んどなかったころ、知人のついで須磨寺町一丁目の旧家の離れ座敷を借りた。二畳の玄関の間と、居間客間各六畳の三部屋で、家賃は月十八円だったが、水道のないポンプ井戸付きの家であった。

私は、昭和十九年三月末に教職を辞し、川崎重工業へ入社したが、一年余りで、敗戦

■随想三題

和田岬線

「阿房列車」

上川庄二郎

△神戸市市長総局調査部長▽



写真提供・朝日新聞神戸支局

「阿房と云ふのは、人の思はくは調子を合はせてさう云ふだけの話で、自分で勿論阿房だなどと考へてはゐない。用事がなければどこへも行つてはいけなと云ふわけはない。なんにも用事がなければ、汽車に乗つて大阪へ行つて来ようと思ふ」などと言つて、△はと▽の一等展望車に乗り、フラリと旅をしたのは、他ならぬ漱石門下の内田百閒でした。

世の中、一億総レジャー時代の今でこそ、「阿房」つまり「遊びの心」は、誰でも認めているものの、戦後は、食べるだけでせい一杯の時代。願望は持つてはいても、とてもそんなお金と心の余裕なんてありませんでした。そんなとき、用事もない旅をした百閒

は、考へてみると、「遊びの心」にとつともなく先見性のあつた方だといえそうです。

私なども、このユーモラスな紀行文「阿房列車」によだれを垂らしていた一人です。

鰻の蒲焼の匂いだけ嗅がされて空腹をしのいでいたような、極めて精神衛生上よくない状態が長く続いていたのです。

こんなことだけが切っ掛けともいえませんが、子供を連れて手近な播但線や草津線などの汽車に乗ったり写真を撮り歩いたりしているうちに、いつの間にか全線乗る羽目になつてしまつたというわけです。

最後に乗り残しておいたのが、地元の和田岬線でした。いよいよ国鉄全線完乗の日、それは、昭和六十一年七月十

九日のことです。この日ばかりは、職場の同僚など七十人もの仲間と一緒に乗ってくれるわ、記者は来るわ、テレビは来るわ、おまけに花東までもらつて感無量の二・七キロ、六分の旅でした。いうなれば、この和田岬線こそ、私にとつての「阿房列車」の最たるものだったのかもしれない。

大手工場従業員専用の、座席を取り払つた古い客車列車が走る沿線には、今も赤いレンガの工場や雑草の生い茂る空地、運河に横たわる貯木場の群れなどの風景が残っています。今さらながら、戦後何十年変わっていないであろう情景に、知られざる神戸の素顔を垣間見た思いがしたものです。

皆さんも、ぜひ一度この和田岬線「阿房列車」の旅をして、昔なつかしいふる里神戸の再発見を試みてはいかがでしょうか。

〔著書にSL写真集「汽車の詩」「汽車の詩―国鉄全線乗りある記―」

（神戸新聞出版センター刊）がある〕



△美術評論家▽

■随想三題

変ったヨーロッパ

変らない

ヨーロッパ

赤根 和生



パリ、コンコルド広場にて
＜赤根夫人とお嬢さん＞

ランスも変ったものだ。故マルロウが文化相時代、市中の古壁を一斉に洗わせた故か街並はすっかりキレイになったがノートル・ダムのですけた内陣も砂と水で洗ったとかで真っ白になっていた。

変ったといえば、片ことの日本語が諸所で聞かれるようになったこと、ヴァチカンのシステイナ礼拝堂の屋上に昇るすり減った石の階段の上層部が鉄板になっていたこと、ミラノ中央駅、18世紀の遺物が、両翼に巨大な女神像を据えた古代ギリシャ・ローマ宮殿風の白亜の壮麗な建造物になり、ロンドンそしてアムステルダムでは、ホテルの室の重々しい鍵が軽便なカードに！序々にオートメ化しているとはいえ、依然、エレベーターの扉、メトロや車輛の出入口は人力でぐいとやらねば：人々は信号無視、平気で車道をわたり、WCにはおぼさんが頭張っている。絶えず人間（自己）が意識させられる仕組、まこと人間くさい社会！文明のゆき過ぎに歯どめをかけるものこそ△文化▽なのだ。

歳末からこの年頭にかけてはじめて家族そろって、半月間の海外脱出を試みた。南のイタリー半島さえ緯度からいえば東北から北海道にかけての冷寒地、クリスマス・イヴはアッシジ、Xマス・ディがフィレンツェなのだから、もし雪が降っていればそれこそホワイトXマスなどと妻子をそのかして重装備で出かけた手前、チラホラとでもきてくれなければ困るのだが、何たる皮肉、一日目のローマから快晴に恵まれ、行く先々も汗ばむほどのポカポカ陽気で拍子ぬけ。大晦日、霧のロンドンさえ晴れわたり、二日アムステルダムに着いてやっと降雨と寒風に見舞われて、内心ホッ。ミラノからジュネーブへもバスに変更してアルプ

ス越えおかげで、モン・ブランはじめ雪をいただく高峰を眼近に仰ぎ、色とりどりの人々が群れるサン・モリッツ・スキー場も眼下に：は初体験。ここからパリへは時速二七〇キロノンストップ超特急TGVで：（始発も終着も同じリヨン駅とは？）凱旋門を臨むあのシャンゼリゼ大通りは、葉を落してまるみえになったマロニエの並木の枝々に豆球の連鎖を絡めて輝やく壮観はノエル新年だからこそ。市の外部は近代建築が増えていたが、ど真ん中、オテル・ド・ヴィーユ（市庁舎）の近くに米人設計のあのポンピドゥ・センターが、巨大なチューブなど無用の長物や何やかやでごてごて嗤われて安泰とは？（中華思想のメッカ・フ



ロングヘアで優雅に過したいと常に思っているのだが、私は面倒くさがり屋なので、いつも短かく切ってしまう。その方がシャンプーも楽だし、乾きも早いからだ。

しかし、他人から見ると色気不足だと思えるらしく、美容院で

「近頃、手軽な半かつらがありますから、パーティの時など利用なさいませんか？」と奨められた。

普段さばさばした私が、長い髪でシャナリシャナリと現れたら、さぞ皆さんびっくりするだろうと、そのカーリーヘアの半かつらをつけてみることにした。

実物を見ると、半かつらというより、つけ毛といた方がいい位、簡単なものだった。私の髪に似た色の長いカーリーヘアの束があり、先に細い黒いリボンがついている。それをヘアバントのよ

□エッセイ・5

あなたも
カーリーヘアを、
どうぞ

田中 千佳 〈作家〉

カット／西村 功

うにして髪の下で結んでおく。要所々々をピンで留めて出来上り。

「まあ、モリ・ハナエさんみたい」

美容院の人達は賞めてくれたが、鏡の中の私はホットケーキみたいな顔に長いカーリーヘアをたなびかせ、少々、カマトト風だ。今一つ、びったりでもないし、優雅にも見えない。しかし、ここまで来て止めるわけにもいかない。——エーイ、

勇気を出してレッツゴー——

私は自分を元気づけてパーティ会場に向った。

その日はお堅い人ばかりのパーティだった。私が入ると、皆、ギョっとしたように注目した。走って来て

「何、これ、どうしたの」

と引っ張る人

「一体、どういう心境の変化？」

と笑いをこらえて聞く人など、さまざまだ。

その他「勇気がある」、「羨しい」、「よく似合っている」、「若々しい」と好意的な意見もあったが、「何と派手な」、「ライオンみたい」、「あんなチリチリにして」、「みっともない」、「年甲斐もなく」というような拒絶反応もあった。

こんなに大きな波紋が起るとは思わなかったのだ、本人の私も少しびっくりした。ほんの座興のつもりだったのに、真面目が靴をはいているような人達には、笑って軽く受け流すことが出来ないようだった。

真面目でもいいけれど、今、世の中で何が流行しているか、大衆は何に興味を持っているか、というようなことに敏感でなければ取り残されてしまう。

自分が生きて来た歴史の中で経験だけで物事を判断し、その他は拒否するのでは、周りの人々と仲良くやっていくことは出来ない。

世の中は多種多様なものだから、先ず相手を受け入れ、それから時間をかけて判断すればいいのだ。自分の経験範囲にないものは、見た瞬間に切り捨てるのでは未来は拡がらない。

あんなにチリチリにパーマをかけて、どうする気なのかしら、と心配してくれた人もいたが、何というイマジネーションの貧困、つけ毛だなんて、考えも及ばないらしい。頭がカチカチなのねえ。

そして、それは又、私への信頼度にもかかわってくる。この100グラムにも満たないカーリーヘアのつけ毛一つで、今までの私への信頼が揺らぐようでは、その人自身も始終ぐらついているのではないだろうか。もっと自分をしっかり確立してもらいたいものだ。

今、日本人に一番求められているのは遊びの精

神だと思う。働いてお金を溜めるばかりでは世界中で嫌われてしまう。時々、パッと遊んでこそ、明日への活力が湧いてくるのだ。上手にスイッチを切り換えて人生を楽しみたい。

もう一つ、日本人に欠けているのはユーモアの精神だろう。気の利いた愉快な会話がどんなに周囲を楽しませることか、イギリスのチャールズ皇太子のスピーチには、いつも上品なジョークが入っていて感心させられる。あそこまで洗練されるには長い伝統と教養が必要なのだろう。ユーモアは遊びの精神にも繋がっていると思う。

話が堅くなってしまうが、要するに、あなたもたまにはカーリーヘアのかつらでもつけてみてはどうですかということだ。

髪型が少し変わったただけなのに、妙に気持が華やき、明るくなってしまふ。不思議なことだ。本だから、一度、是非どうぞ。

奥さんが、これでストレスを解消し機嫌よくなるのなら、世の夫族も喜ぶのではないだろうか。ちなみに、私のカーリーヘアを見た夫は、眺め回して

「ふーん、まあ、賞める程よくもないけど、悪くもない。好きにすればいい」と少しも動じなかった。

——何て器の大きい人——

私は感心し、改めて惚れ直し、二人でビールを飲んで安らかに寝た。



▲筆者紹介 V 本名林陽子。朝鮮京城生まれ。戦後引き揚げて京都に住む。旧制同志社女専英文科卒。アメリカ系商社に就職。結婚、その後出産のため退社。以来専業主婦。「マイ・ブルー・ヘブン」で昭和六十年代中央公論女流文学新人賞を受賞。現在、東灘区在住。

ESSAY

特別寄稿

宇野さんのこと

映画監督・演出家
若杉 光夫



「母のない子と子のない母と」(昭和27年)より

宇野重吉が一月九日正午なくなった。

その衝撃は、ぼくの中でまだ整理されていない。多分、何年も何年もかかってやっと事態を冷静に見つめることが出来るようになるだろう。人間は皆死ぬのではあるけれどもその人の死が、多くの他の人間の生き方や人生観に決定的な影響を与えるような場合は、それほど多くはない。宇野さんの死は、ぼくにとってまさにそのようなものであった。

なくなられた直後、お通夜、告別式のたぐいは一切しないことがきまった。これは、宇野さんの

希望でもあったし、ご家族の望みでもあった。劇団(民芸)はそれを受けて、殺到する取材陣や弔問のお客さまを、ご自宅前でお帰し願うことにした。稽古場で偲ぶ会をやって、弔問のお客さまをそちらの方に誘導もした。宇野さんは、奥さまはじめ御家族だけに囲まれて二夜を自宅ですごされたことになる。誠に異例なことでは折角かけつけてきて下さった弔問のお客さまには申し訳のない次第であったが、劇団員のほとんどが、なくなれた宇野さんと直接のお別れすらしていないのである。

深夜、特に許されて宇野さんのお宅にお別れに参上した。まるで眠ってでもいるかのように横たわっている宇野さんの横に、つきっきりだという奥さんがいた。思いなしか、奥さんの顔は明るく、ほほえみすら浮かんでいた。そういえば、まさに、そうなのだ。宇野さんは、なくなつて始めて奥さんの所に帰つて来たのだ。それまで、ぼくらが、宇野さんを、奥さんと娘さんと息子さんから取り上げていたのだ。今こそ宇野さんは奥さんのもとにもどつたのだ。

許して下さい。宇野さんを奥さんの手にお返しするのが遅すぎたのです。ぼくらのエゴイズムが、奥さんから宇野さんを取り上げてしまふことはキリキリと痛んだ。忘れていたのではないのです。知つてはいたのです。だのにぼくらにはそうする力がなかった、いろんな言い訳をしながら、そうしなかった。ぼくは下げた頭をしばらく上げることが出来なかった。とりかえしのつかぬことをしてしまつ



出演者に演技指導する著者（右端）

た。ぼくは齒がみするばかりであつた。聰君（宇野さんの御長男）のお話によると「おふくろはこの幾日かすぐく悴せそうだった」という。この言葉が、又、ぼくの胸を

裂く。

納棺も出棺も御家族を中心に行なわれ、ぼくらはそれを警固し見守るだけであつた。二月十日、劇団葬が行なわれることになっているが、劇団員はそれぞれの仕事を分担して、式場に参列出来るのはきわめて少数である。

宇野さんは、ぼくらだけのものではないのである。第一宇野さんは死んではない。ぼくらの胸の中に、今こそ、強烈な光芒を放つて生きている。生きつづけている。それにしても宇野さんの死の直前の生が、余りに喧伝されすぎたきらいがあるように思う。宇野さんは「壮烈な生き方」とか「鬼気迫る舞台」とかいふ表現をひどく嫌つた。彼はごく自然にああ生きたのだし、ごく自然にああいう風にしたのだと思う。誰にでも真似の出来ないことだから、エキセントリックな表現にもなったのだから、宇野さんという人の一面、それもほんの一部分しか見ていないような気がする。宇野さんという人の全仕事は、もっと奥行きがあり、もっと巾広くもあつた。それは次第に明らかにされてゆくだろうが、ぼくにとつての宇野さんは四十年かかわりつづけてきた、こだわりつづけて来たぼくの宇野さんなのだ。「きいた風な口きくな、生意気に！」お墓の中の宇野さんのつぶやきがきこえてくる。それはそれでいいのである。ぼくはぼくの中の宇野さんを大切にしたいのだから――。

人を愛するということはそういうことだとぼくはしみじみ思う。



小豆島町での著者と宇野重吉氏

踊る忠臣蔵 世界を魅了

溝下司郎

（チャイコフスキー記念
東京バレエ団芸術監督）



バレエにあまり関心がない人でも、『忠臣蔵』がバレエになった」ことを、マスコミを通じてご存知の方は多いのではないかと。『忠臣蔵』という日本人の「心」が、バレエという西洋の文化を象徴するものと、合体するなどというのは、桜の木にチューリップの花を咲かせるようなもので、イメージの紛糾を免れないかもしれない。

この『忠臣蔵』を題材にしたバレエ『ザ・カブキ』を東京バレエ団のために創ったのは、モリス・ベジャール、『今世紀最高の振付家』と謳われている。ベジャールは一九六七年以来、彼の主宰する「二十世紀バレエ団」（現在はベジャール・バレエ・ローザンヌと改称）を率いて四たび来日、その革新的でダイナミックな舞台によってセンセーションを巻き起こしてきた。ベジャールが大の親日家であり、日本の文化に造詣が深く、それをヨーロッパに広めることに少なからぬ功績があったことは、日本政府から勲三等旭日中綬章を叙されていることでもお分かりいただけるでしょう。

一九八六年秋、東京バレエ団は、この作品をもって、第九次海外公演を敢行した。ロンドンのロイヤル・オペラハウス、ミラノ・スカラ座、ベルリン・ドイツ・オペラ、ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座という五大オペラハウスを総なめにするツアーである。このうちの一つだけでも、いままでいかなる日本の芸術団体も出演したことはなく、このようにわずかに二カ月半という短い間で、五大オペラハウスにことごとく出演することなど、

欧米の団体でも例がない。日本には残念ながらオペラハウスがないので理解してもらいにくいのが、伝統と格式を誇るその国を代表するオペラハウスに出演することは、実績のある一流の芸術家・芸術団体しか許されないのである。

バレエは女・子供が見るものと、日本では妙に誤解されているふしがあるが、一度でもヨーロッパのオペラハウスでバレエを見た人なら、そこが成熟した大人だけの世界だということを、いやでも思い知らされるだろう。豪華という言葉さえ色あせてしまいそうなロココ調のインテリア。客席は着飾った紳士淑女であふれ、漂う香水のにおいが気分を高揚させて、束の間の夢を見せてくれる非日常的な空間——それがオペラハウスなのである。

そんなオペラハウスへ、バレエ版『忠臣蔵』が討ち入り、みごと本懐を遂げたわけである。ストーリーは、歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』に依っているが、討ち入りの四十七士が入り乱れての群舞は迫力に富み、見るものを圧倒せずにはおかない。一番最後に四十七士が旭日のもとで切腹するところは、ヨーロッパのどこの劇場であつてもシーンとなってしまう。何ともいえない静けさが客席を包む。切腹の後、照明が次第に消えると、観客がいまかいまかと拍手をするのを待っているのが感じられる。この全員打ち揃って果てる場面は、日本人だからこそ、日本人の心情に訴えるものがあるのかと思えばそうでもなく、外国人であっても変わらない。これは万国共通の

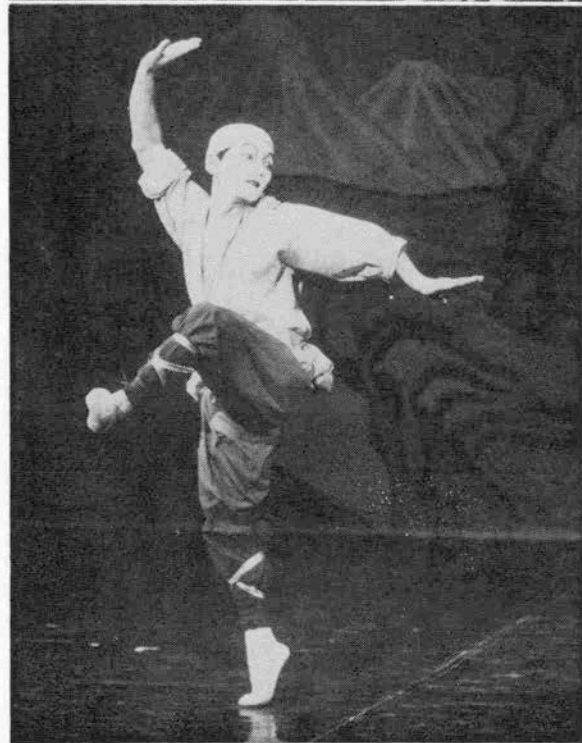
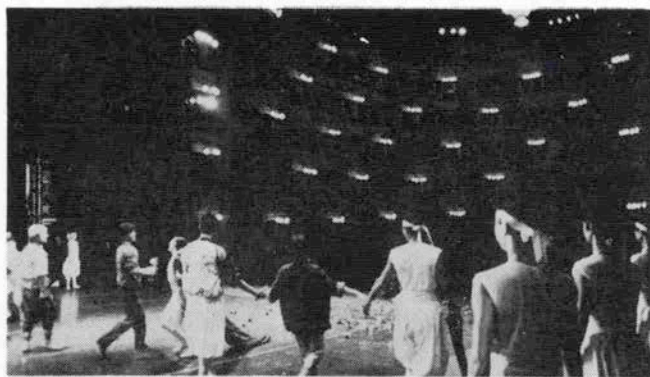
「演歌の心」だ。「忠臣蔵」はベジヤールの魔術を施され、「ザ・カブキ」になって国際的な生命を得た。それはヨーロッパの人々に満開の桜の美しさを伝えたいばかりか、桜の木に宿る日本人の「心」をも広く知らしめることに成功したようなものである。

昨年の十二月三日、この「ザ・カブキ」をひっさげて神戸公演を行った。神戸に生まれ、十五歳から今岡頤子先生のもとでダンスを学び、踊りの流れを体得した。そのわたしが、現在、芸術監督の立場にある東京バレエ団を率いて神戸公演を行うことになるとは、まったく夢にさえ思わなかったことだ。「故郷に錦を飾った」と神戸の知人から囁し立てられても、なぜかピンとくるもののがなかった。それに劇場が十五歳のとき、初舞台を踏んだ神戸国際会館であっても、不思議なくらいいつもと変らない気持で舞台をつとめることができた。ただ、公演が

終ってから、神戸に住んでいる姉のところの電話が、公演を見た人からの電話で三日間鳴りっぱなしだったと聞かされたときには、自分を育ててくれた神戸に、ほんの少しでも恩がえしができたような満足感を覚えたものだった。「ザ・カブキ」は、自分自身にとって、東京バレエ団にとって、日本バレエ界にとって、また世界中の観客にとって、たいへん大きな財産になった。「ザ・カブキ」は「忠臣蔵」がそうであるように、老若男女を問わず、人々の心の琴線に触れるものがある。たとえ初めてバレエを見た人にも深い感銘を与えずにはおかないのだ。

高砂で公演した帰り、駅のプラットホームで汽車を待っていると我々が「ザ・カブキ」の出演者と知って、老夫婦が近寄ってきた。いま見てきた舞台の感激さめやらぬといった面持ちで「いい死に土産ができた」と手を握られたときには思わず胸がつぶれそうになってしまった。

▲ミラノのスカラ座での「ザ・カブキ」カーテンコール
◀「ザ・カブキ」の伴内を踊る筆者



△その103▽
残してほしい
毎日新聞神戸支局ビル

武田 則明△建築家・港まち神戸を愛する会▽

昨年の暮に毎日新聞ビルが壊されそうだというので仲間と建物の探検に出かけた。この建物は河合浩蔵の晩年の作で大正14年に竣工した。地下1階地上3階の小じんまりとまとまった建物である。竣工後60年以上経過しているのいたんでおり補修の必要な状態であるが構造はしっかりしていた。特に便所の給排水配管が老朽化しており、度々補修しているが漏水が止まらない。この建物を壊そうとのきっかけはこの漏水から始まったと言える。屋上の防水も補修しているがすでにいたんでおり漏

水の危険性がある。便所の漏水を直すには姑息なことではせずに、仕上と防水を全てめくり取り、再び防水と仕上と給排水配管をやりなおす必要があろう。この為には新しく便所を作るぐらい経費がかかるだろうが必ず直る。

次に現存駐車場が少なくて困っているの、この際駐車場をきっちりつくり、建築基準法上許されるだけ延床面積を増して、それを貸して儲けようというのが建て替える目的である。

太平洋戦争の時、連合国の思いやりで爆撃を免れた京都や奈良の

まちなみが壊されて行ったのは、まさにちよつと便利で合理的な生活をしたから。古い建物を壊して駐車場をつくり、モダンな器をつくり、ちよつと儲けたいからと容積率いっぱい建物をたててきたから、その集積としてまちなみが壊されて行った。歴史的なまちなみを次の世代に伝えることは私達の責任だと思ふのだが。

建物の保存とまちなみの継承はこのちよつとした便利性、合理性、ちよつとした金儲けを今までの生活と同じように我慢すればすむことである。このちよつとした思いやりが文化を守り育てることになり、お金をはなばないものごとだけに使うのではなく、目立たないがこうした保存のために使うことこそ最も文化的といえるだろう。



(上) 建物上部の装飾 (中) 南側から見た外観
(下) 正面右側入口廻りの特長ある装飾

その服、すてきね。



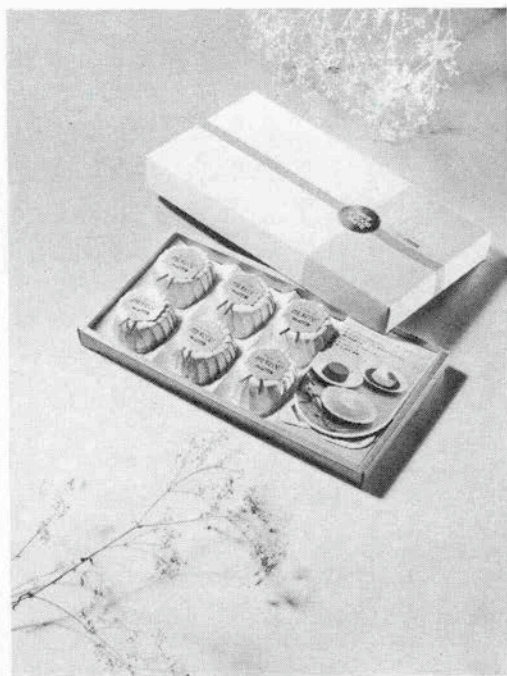
毛皮を単純に、強いが弱いかといえば、とても丈夫で強い素材です。しかし、美しさという点でみると、とてもひ弱です。特に毛並みと毛のつや。中でも火には絶望的な弱さです。毛先がちりちりになって、その部分を取りかえないかぎり修理不能となります。また手提げのハンドバッグを腕にぶらさげると毛がねてしまい、美しさをそこねます。ジュース、お酒の近くへはよらない、香水もだめ、その上保管にも気をつけなければ虫のエジキとなります。毛皮は弱い。だからこそ、リフレッシュクリーニングが時々必要です。



本社/神戸市灘区紀田町1丁目2-16
078-851-2440

■大阪支社/06-853-1332 ■つかしん店/06-420-3754 ■ロープ・ニシジマ/078-332-2440
■山手店/078-221-2440 ■宝塚店/0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル/078-221-9110

新発売 ムースセット



レアチーズ・ヨーグルト・チョコレート

6ヶ入 ¥1600・12ヶ入 ¥3000

— 北 欧 の 銘 菓 —
ムーハイム・コンフェクト



第17回

ブルーメール賞

月刊神戸っ子

選考座談会〈美術部門〉

独創的な空間構成が光る 植松奎二へ

★若い世代の台頭

増田 今回の安井賞で兵庫県勢は赤松玉女、太田正人、木津文哉、保ヶ淵静彦、山田友子の5名が入選しています。世代が代わったなあというのが感想ですね。そしてもう少し上の年代で頑張っていると思われるのが、松井憲作、初田寿。初田は韓国との現代美術家との交流を図った観・感・歓展が評価されますね。他には吉仲正直や大阪現代アートフェアなど大阪を中心にしている山田信義。女性では去年も出た田川絵里や金月紹子。版画の神野立生。門脇正弘、鴨下葉子もよくなってきた。

あと常連ですが上村和夫とか昨

年受賞の松原政祐も新鮮な作品を出していたようです。

伊藤 僕は播州地区の代表を少し挙げていきたい。まずリーダー的存在の小野田実は少し型を変えようとしています。抜きんでいきますね。そして二紀会の大西敏巳、描象でありながら具象的なムードをもっている。かつて安井賞の常連候補だった南俊宏も適確な描写をしていますね。加えて、大石可久也、ユタカ順子、上尾忠生、石塚博などの少し上の世代も新たな魅力を發揮しているように思えるのです。

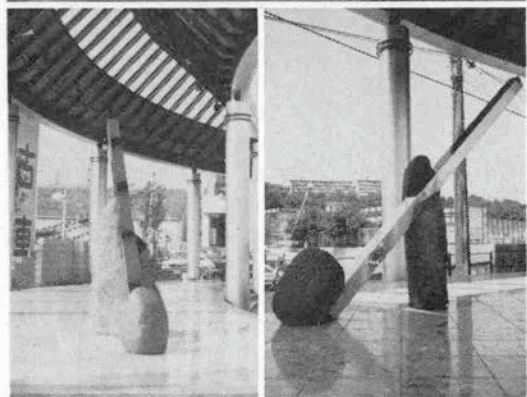
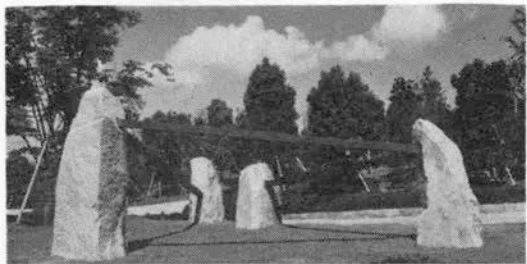
赤根 でも彼らはブルーメール賞としては該当しないんじゃないか

な。

伊藤 確かに。でも年齢なりの何かをもっているという点で評価はできると思う。それに少し分野は違いますが染色の山本和子や陶芸の永田隆子を推したい。

赤根 僕は男性では植松奎二、女性では三村逸子と津田仁子をあげたい。三村は版画から出発している人だが、今度の個展はよかった絵画の心をつかんでいる。

高橋 去年も挙がってますが、植松、河崎晃一、正延敏、塚脇淳、椿昇、女性では杉山知子。あと、彫刻の坂口正之も有望ですね。井原康夫もカムバック組として名前をあげたい。



上/滋賀県立近代美術館の石の彫刻
下/神戸市垂水区の自動車ショールーム内の作品

★国際的活躍とモニュメントとしての価値が光る植松奎二
増田 ひととおりの名前が挙がったところで、じゃあ絞りこんでいきましよう。若くて、ユニークで、将来性があるという点に重点を置くと赤松と塚脇ですね。それに先程のエントリーにもう二人加えてほしいのが天野潮彦と彫刻の松本薫。
赤根 天野のデッサン力は山本文彦(第4回受賞)に通じる所がありますね。でも賞の候補としては先程の植松・三村・坂口でしょう。高橋 僕は塚脇・坂口・植松です。増田 植松は最近垂水・加古川・滋賀にいいモニュメントを残していますね。
伊藤 私も植松の仕事は価値があると思います。

高橋 今まで彼の仕事はモニュメントとして残りにくいものが多かったんだが、先程の三作品の様に残るものが出てきたことは、興味深いですね。
赤根 インスタレーション以前のインスタレーションだな。
増田 それに植松はベニス・ビエンナーレにも日本の三人の作家の一人として出展するでしょう。
赤根 日本への滞在期間が短いという点も裏返せば、海外への広がりがあって、ということだからね。実に神戸らしいじゃないですか。
伊藤 ブルーメール賞としてのスケールも広がりますね。では今回は植松に決定ですね。
全員 賛成。 〔文中敬称略〕

●受賞者メモリアル

- | | |
|-------------|--------------|
| 1. 彫刻/山口 牧生 | 9. 造形/榎 忠 |
| 2. 造形/丸本 耕 | 10. 版画/松谷 武判 |
| 3. 洋画/小西 保文 | 11. 平面/木下佳通代 |
| 4. 版画/藤原 向意 | 12. 造形/宮崎 豊治 |
| 5. 平面/斎藤 智 | 13. 平面/藤原 志保 |
| 6. 洋画/鄭 相和 | 14. 建築/武田 則明 |
| 7. 洋画/山本 文彦 | 15. 平面/石川 晴久 |
| 8. 造形/堀尾 貞治 | 16. 平面/松原 政祐 |

選考委員



〈大阪芸術大学
教授〉
高橋 亨



〈姫路市立美術館
副館長〉
伊藤 誠



〈兵庫県立
近代美術館次長〉
増田 洋



〈美術評論家〉
赤根 和生



★「邦楽サロン」と

「こうべのおどり」

佐野 では年間の目立った舞台をあげてもらいましようか。

岡田 市立博物館の邦楽サロン、好評ですね。今年で3回めになるんですが、非常によいことだと思

います。音響もすばらしいし。

佐野 文化ホールでは妹尾館長の発案で「こうべのおどり」を始めました。続けるそうだから地域文化育成に効果が必ずでています。

岡田 舞台人は舞台に立たないと成長しません。その機会がもてることは大いに励みになります。

★充実した舞台成果

名生 劇団四紀会の30周年が話題

第17回

ブルーメール賞

月刊神戸っ子

選考座談会（舞台芸術部門）

スペインの情熱と歓びが踊れる 東仲 一矩

を集めました。演技も統一されてきて楽しみがもてます。

岡田 それに神戸市文化賞をもらった貞松・浜田バレエ団「眠れるの森美女」を全幕やりました。

名生 若柳吉金吾の第1回リサイタルは成功でした。迫力があって。

佐野 厚味がでて体全体で立派に踊れますね。ただ欲をいえば評判のよかった演目を列べて第一回目はあれでよいでしょうが、リサイタルはやはり阿修羅の姿であるべきだと思えますが。次回を期待しています。

名生 地唄舞の松本尚蒔、何かひとつ脱皮した感じを受けますね。

岡田 ブルーメール賞の受賞がい

選 考 委 員



元神戸新聞取締役局長

佐野 達寛



＜演出家＞

岡田 美代



兵庫県立兵庫高校教

名生 昭雄



61.2.6 芦屋ゆとりある倶楽部にて東仲一矩

佐野 東仲一矩の活躍もあげたいですね。厚生年金、文化ホールでリサイタルをやりました。充実して「スベイン」を踊っていました。名生 成長著しい。何かをつかんだように思うけど。★意欲的な活動続ける東仲一矩へ
名生 絞り込んで須永克彦、久田徹二、東仲一矩あたりでし

ろんな意味で刺激だったようです。
佐野 内容がつまってききましたまだのびる人ですので「時化の花はいつまことの花になるか」。世阿彌の言葉を贈っておきます。
名生 国際ジャパネスク歌舞伎も健闘しました。
佐野 「源氏店」で歯切れよいセリフで。岡山博の目玉公演に招待されているし、どしどし他都市へ進出すべきです。
岡田 吾妻秀房、花柳寿加達らが期待される人ですね。
名生 竹村まこともがんばっています。

佐野 久田徹二の「俊寛」を見ました。がくつと砂にめり込む絶望感はすさまじかった、形がいい。
岡田 めぐまれた天性を持っていますから自重して、頑張ってください。
佐野 須永克彦の中国巡演はご苦労さまでした。幅が出て来ました。岡田 藤田佳代のオペラに果たした役割も大きかったと思います。
佐野 踊れる人ですからまだまだ第一線で踊り続けてほしい。上原まりがいい仕事をしています。生涯琵琶師としての運命にある人だから、早く柴田旭艶の声を作ってほしい。「永遠の宝塚スター」から脱皮できる人です

から。
名生 柴田旭堂という立派な師匠がいるし、勉強もよくしている。

ようか。

岡田 大阪でのロルカは見ませんが意欲的で毎年スベインへ旅しています。

佐野 そういうことが大切です。多角的にみて東仲一矩はどうですか。

名生 よいですね。意欲的な活動に拍手を贈りましょう。女性にももてるそうですが（笑）。

岡田 最後は照明の林恵介さんが亡くなったのは大変に惜しい。

佐野 昨年のこの選考会で「傘の内」の照明を絶賛しましたのに。「年々歳々花相似たり、人同じからず」で惜しい人をなくしました。

名生 お互いに舞台人も健康に留意をお願いご冥福を祈りましょう。

△敬称略▽

●受賞者メモリアル

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 邦舞家/花柳恵一子 | 10. 演劇/コメディ・ |
| 2. 邦舞家/若柳吉由二 | ド・フォーゲツ |
| 3. 能楽師/吉井 順一 | 11. モダンダンサー/ |
| 4. 邦舞家/花柳芳五三郎 | 加藤きよ子 |
| 6. 邦舞家/花柳 吉史 | 12. 舞踊家/藤田 佳代 |
| 6. 邦舞家/藤間緑寿郎 | 13. 邦舞家/花柳五三輔 |
| 7. 邦舞家/尾上 菊見 | 14. 映画監督/白羽 弥仁 |
| 8. 能楽師/藤井 徳三 | 15. 邦舞家/松本 尚壽 |
| 9. 仮名手庵歌舞伎/ | 16. 笑クリエイト社/ |
| 海野 光子 | 楠本 喬章 |



第17回
ブルーメール賞
月刊神戸っ子
選考座談会へ文学部門へ

一つの「決着」をつけた
たかとう匡子

★あまり目立った動きの無かった
62年

伊勢田 ここ2年ばかりの動きを
思い返してみると、61年は候補に
あげられそうな作品が35編位あっ
たのに、62年度は15編位しかない
ように感じましたね。

君本 私も、今回はほぼ似たよう
な数を選んできましたが、確かに
62年度は、詩にとっては不作の年
だったように思います。

伊勢田 直接ブルーメール賞には
該当しないけれど、以倉紘平「日
の門」が福田正夫賞をもらってい
ますね。

安水 雑誌発表は大阪だったんで
すが、尼崎に住んでいる。

伊勢田 それから、これも賞の対
象にはならないんだが、阪口穰治
という重度身心障害者の方が、短
い詩ですが、心のこもった良い詩
を書いてましてね。一昨年「ささ
やかな木」という作品集を出して
います。いい仕事をしていますよ。

君本 丸本明子は、61年に1冊、
62年に1冊、続けて出していますよ。
伊勢田 吉田正道も続けて出して
ますね。

君本 「一昨年在「ムシ」、昨年在
「いま・ここ」です。

伊勢田 その他には、北垣健二の
「夜の陽だまり」が記憶に残って
います。

安水 この人も尼崎の人ですよ。

選考委員



<詩人>
君本 昌久



<詩人>
安水 稔和



<詩人>
伊勢田史郎



会詩集「ヨシコが燃えた」

君本 中原緋佐子の「紅の花」も面白かった。

伊勢田 岩崎風子「つち音のなかで」には不思議な印象を受けました。それから「野火」に所属している在間洋子の「手結び」も。

君本 小西民子の「捨テル」。玉

川ゆかの「ちいさな事件簿」。

伊勢田 桑門つた子の「樹々」。

君本 明石の伊藤昭子の「碧い小鳥」。

安水 挙げると何人かは印象に残っているが、全体的には低調だったような気がしますね。何か変動期のような感じですよ。

伊勢田 文学を一生の仕事だと思いう人が少なくなっただけですね。そういう意味で印象に残ったのはたかとう匡子の「ヨシコが燃え

た」ですね。

君本 一昨年、昨年を見てみると詩集の生産量としては女性が多いですね。他に福田知子の「猫ハ、海へ」がある。男性では谷田寿郎「とりこえの空」かな。

安水 白川淑「祇園ばやし」も。

しかし、私は2年先か4年先にイキのいいのが出てくるような気がしていますよ。

伊勢田 その他には永井ますみ「うたって」、たかぎたかよし「今夜も木星が近づいているはず」。

君本 後は、水こし町子「水の中

で」、瑞木よう「揺籃」。

伊勢田 候補はこの位にして、今回は、私はたかとう匡子をすすめますね。

君本 僕は、1つの詩の形態とし

ての完成度を買って福田知子の詩をおします。

安水 僕も、たかとう匡子が、戦時中に亡くなった妹さんのことを今まで引きずってきて、この詩集を出すことによって、一つの決着を自分でつけたという点で、たかとう匡子がいいように感じます。

伊勢田 まあ、年齢的に見ても、福田知子は、まだ若いし、まだチャンスはありますから、今回はたかとう匡子ということで。

安水 一つ提案があります。中堅の詩人を対象にした詩の賞をつくっていただけませんか。

君本 賛成ですね。

伊勢田 神戸には竹中 郁さんという大先輩がおられたのだから、その意味でもぜひお願いしたい。

●受賞者メモリアル

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 詩 / 中村 隆 | 6. 詩 / 梅村 光明 |
| 2. 小説 / 鄭 承博 | 10. 小説 / 吉保 知佐 |
| 3. 短歌 / 小泉八重子 / | 11. 詩 / 季村 敏夫 |
| 4. 小説 / 福元 早夫 | 12. 小説 / 福岡 勝利 |
| 5. 詩 / 三宅 武 | 13. 詩 / 時里 二郎 |
| 6. 小説 / 秋吉 好 | 14. 評論 / 松尾美恵子 |
| 7. 詩 / 江頭 越子 | 15. 詩 / 武田 信明 |
| 8. 小説 / 桜井 利枝 | 16. 小説 / 山西 史子 |